

2022年キリスト教一致祈禱週間「共同礼拝」 私たちは東方で星を見て、 拝みに来た

キリスト教一致祈禱週間に当たり、教区内の三か所でエキュメニズム委員会主催の共同礼拝が行われた。1月18日(火)は大阪カテドラル聖マリア大聖堂で、21日(金)は神戸中央教会、22日(土)は和歌山紀北教会今福聖堂で開催。コロナ禍にもかかわらず、計100人以上が参加した。

カトリック側からの共同司式者として参加したのは、各教会の主任司祭ヌノ・デ・リマ神父(玉造)、エマニエル・ポボン神父(神戸中央)、パウロ・セコ神父(和歌山紀北)とエキュメニズム委員会委員長の筆者。大阪会場では前田万葉大司教、神戸と和歌山会場では酒井俊弘補佐司教が主

司式者として参加され、普通の教会との一致を表された。

「キリスト教一致祈禱週間」とは、毎年1月18日(25日、世界中のカトリック信者を含む、すべてのキリスト教派の信者が一致のために反省したり祈ったりするために、1908年に始まった伝統だ。



和歌山紀北教会 今福聖堂での共同礼拝にて。左から、日本基督教団の松田光代牧師、日本聖公会の鈴木恵一司祭、酒井司教、セコ神父、ロッコ神父(筆者)

大阪教区では2018年から、日本聖公会と日本福音ルーテル教会、日本基督教団と共に「共同礼拝」として行われるようになった。昨年コロナ禍のため、準備されていた企画は中止になったが、今年に行うことができたのは大きな恵みだ。

各年、反省と祈りの資料は、世界の特定地域のさまざまなキリスト教宗派を含む委員会によって作成され、あらゆる地域、教派の人の

とが同じ言葉や精神で祈れるように、諸言語に翻訳されている。本年の資料は中東の教会によって準備され、東方教会の伝統的な味わいを感じられる。

共同礼拝のテーマは、マタイによる福音書2章をもとに「私たちは東方で星を見て、拝みに来た」とした。教派間の違いや対立があっても、キリストに向かつて共に歩み、神の愛を現世であかしすることができるという意味で、このテーマはエキュメニズムの観点から、特に意義深いものだと思う。

共同礼拝の目的はまず、私たちの一致はまだ完全ではないが、洗礼によってキリストと結ばれていることを確信し、教派の分裂にもかかわらず、すでに一致していることを神に感謝して祝うこと。さらに、分離した教会の間の一致がより強くなり、神の国において共に完全になるように祈ることである。

(文 エキュメニズム委員会
ロッコ・ビビアーノ神父)

+ 大阪教区 + 修道女連盟研修会

1月10日(月・祝)9時半の開会ミサとともに、修道女連盟の研修会がサクラファミリアで行われた。対象は修練者・志願者を含む修道女で、講師は酒井俊弘補佐司教。テーマは「ともに歩む教会の一員となること—シノドスに向かって歩む『わたし』と『わたしたち』—」。



国際色豊かなメンバーで、若い年齢層のシスターたちも多く参加

コロナ第6波が始まり、前日まで中止または非公開を考えていたが、参加者の再会の喜びの声を聞き、開催してよかったと思っている。教会のスタッフの厚意でミサおよび講話がライブ配信され、来場できなかったシスターたちもWeb参加できたことは大きなお恵みだと感じた。

酒井司教は、シノドス(世界代表司教会議)の精神と修道者の実生活との関連について、シノドスのロゴを示しながらこのようにお話しされた。「教皇フランシスコの回勅『兄弟の皆さん』の中の“わたしたち”の意味するところは、修道生活にとっても根本的なこと。さまざまな世代、性格、立場、カリスマ、召命をもった人たちが若者と子どもを先頭に同じレベル(地平)を歩き、指導者や上長者は先頭ではなく皆の中に入って歩む——大切なことは互いの違いを尊重しながら、皆が同じ方向に向かっていること。それが本物の一致であり、その一致が共同体、組織の力となる。そして、一人ひとりが善いサマリア人のように自ら隣人となっていくこと。結果的に失敗しても、自分たちが成長すること、聖人となること、修道会のカリスマを生き、神のみ旨に応える者となることが大切であり、結果ではなくプロセスに意味がある。心の平和がなくなるのは、計画を実行することを目標として、神の思いから目をそらしてしまうから」。

参加したシスターたちの声

- 「シノドスがとても身近になりました。修道生活もシノドス的な歩みをするものだと改めて気づきました」。
- 「高齢者が多い共同体なので、ライブ配信で聞きました。出かけることができないシスターたちへの配慮に本当に感謝しています」。

大阪教区司祭

パウロ 竹内新二神父(94歳)帰天



竹内新二神父は、1月27日、老衰のため仁豊野ヴィラにて帰天。長らく法務の仕事に尽力した。

【略歴】1927年10月11日、大阪府大阪市生まれ。71年2月28日、司祭叙階。71年〜74年、田口芳五郎大司教の

もと司教秘書を務めた。74年〜76年、泉佐野で助任。77年〜81年、橋本と住之江で主任。一年のサバティカルの後、87年まで和歌山信愛女学院講師として勤務。その後、93年まで法務代理選任(司教館居住)。93年〜2004年、甲子園、夙川、豊中、箕面で協力。04年〜06年、仁豊野ヴィラで静養。6年ほど屋形町教会居住。以来、仁豊野ヴィラに戻り居住。

訃報



ジャン・マリ・ペンケレシ神父(パリ外国宣教会)は、2022年1月7日、ドムスガラシアにて老衰のため帰天。97歳。フランスのポール出身。

1948年10月3日、司祭叙階。翌年来日。52〜53年、三田助任。53〜56年、尼崎主任。65〜93年、たか

とり・(旧)下山手・(旧)灘・(旧)須磨・(旧)中山手で司牧。56年、カトリック青年労働者連盟(JOC)阪神地連指導司祭。福音を大切にしながらキリストの復活をあかしして止まなかった。70年以上、キリストのため、日本の民のために人生をささげた。あらゆる状況において希望を持ちながら、賛美と感謝をささげ、全てをキリストのみ手にゆだねた良い宣教師だった。永遠の憩いを待ち望みながら、平和のうちにこの世を去った。